書評

倉田稔『ルードルフ・ヒルファディング研究』（成文社、2011 年）

内田博*

はじめに

マルクス以後のマルクス主義というマイナーな研究分野を日本で切り開いたのは、60 年代に研究を開始した世代である。高校生から大学院生かけて彼らに学んだ世代が、研究成果を書物の形で著したのが 90 年代である。この時代が研究のピークであった。この世代は現在ではほとんどが 60 歳以上であり、数年のうちにほぼ完全に大学から消える。また彼らのほとんどは、社会科学系の大学院博士課程で後継者を養成する機会を得ることができなかった。

そのこともあって、21 世紀に入ってからマルクス以後のマルクス主義に関する若手の研究が散発的に現れたとはいえ、この分野での研究者養成を組織的に支える基盤がほとんどないのが現状である。

まず、学部・学科レベルでいえば、現在の社会科学系のカリキュラムにおいてこの分野に触れることのできる機会はきわめて少ない。また、この分野を話題にできる教員も少ない。図書館には古い文献はあるだろうが、日本語で読めるこの分野の雑誌論文はほとんどない。[1]そのなかで何らかの形でこの分野に関心をもった学生が研究者を志したとして、研究指導を行える大学院博士課程担当教員は稀である。指導教員に出会えたとしても、学会発表や論文投稿を含む研究交流の機会は、他分野に比べて少ない。[2]

いわば、60 年代の末から 90 年代半ばにかけて認知されつつあった「マルクス以後のマルクス主義」研究は、日本では滅びの道を歩んでいるといってよい。筆者もそれをともにするひとりである。そうしたなかであえて入門書として書かれたのが、本稿で取り上げる倉田稔『ルードルフ・ヒルファディング研究』である。

倉田はこの分野の研究を切り開いていった人間のひとりであり、1975 年に『金融資本論の成立』を著して以後、ヒルファディング研究を中心に、ハプスブルク研究、小林多喜二研究など幅広い分野で執筆活動を展開している。その倉田が本書を書いた理由は、本人の弁によれば、「誰もヒルファディングを知らない」[3]からである。ヒルファディングといえば、日本においてこの分野でもっとも多く研究対象とされた経済学者、政治家、活動家のひとりである。1970 年代半ばまでの経済学部の学生であれば、ヒルファディングの名前くらいはどこかで耳にしたはずである。読んだことはないが知った気になっている人物のひとりがヒルファディングであり、ヒルファディングは緩やかな教養の一部をなしていた

*藤女子大学人間生活学部

[1]わずかな例外が雑誌『情況』である。

[2]そこで、思想的難民救済センターとして形成され、機能したのが、毎年一度開催されるポスト・マルクス研究会である。1994 年に第 1 回が開催され、現在まで 19 回続いている。

[3]第 19 回ポスト・マルクス研究会（2012 年 3 月 28～30 日、岡山大学経済学部）における、筆者の書評へのリプライのなかでの発言。

のである。それを誰も知らないという現状にあえて挑んだのが『ルードルフ・ヒルファディング研究』である。

本稿では、この書物がフルファディングを認知させる上で、それを通してマルクス以後のマルクス主義という分野を認知させる上で、どのような機能を持ちうるのか検証する。

本書の構成

本書の構成は以下の通りである。著者によれば、ヒルファディングに関わる主要な論点をほぼ時系列的に配置したのが、本書である。

序
1　ヒルファディングの評伝から
2　『金融資本論』
3　中央ヨーロッパ論
4　ルードルフ・ヒルファディングの経済理論と思想の転換
5　ヒルファディング外伝
6　ヒルファディングの最期
7　研究

最後に文献紹介を置いたのは、より進んだ読書へ誘導する入門書の機能からして的確である。

重要なのは、『金融資本論』以後のヒルファディングが、詳しく扱われていることである。金融資本論研究はこれまでのヒルファディング研究の重点領域であったが、そこでは往々にして、ヒルファディングはマルクス→ヒルファディング（→レーニン）というマルクス主義内部の縦系列で捉えられることになる。こうした視角はこれまでのマルクス主義研究の中心（＝マルクス主義展開史）ではあったが、それだけでは現在の研究水準から見て狭い。もうひとつ重要なのが、マルクス主義者の思想や行動を、非マルクス主義者を含む同時代史の枠組みで捉えることである。そのもっとも成功した例が佐藤政則のボグダーノフ研究である。著者は、２『金融資本論』以後に、中期（ドイツとオーストリアの革命、ワイマール共和国）と後期（晩年）の諸論点、中央ヨーロッパ論、現代資本主義論（唯物史観の修正）、外伝を置く。それらはいずれも、マルクス主義者のみならず同時代の幅広い思想家・理論家・実践家との関わりを意識させざるをえない点で、読者を同時代史としてのマルクス主義研究に誘う。

この点は、研究水準ではなくて、入門書を考える上でも重要である。というのも縦系列のマルクス主義展開史を理解するには、マルクスや以後のマルクス主義に関するある程度の理解を必要とするが、そうした理解を前提できる読者はほとんど存在しないからである。それよりも、中央ヨーロッパ論に見られるヨーロッパ統合論、現代資本主義論に見られる組織化や調整といった問題の方が、まだ読者にはなじみがある。そこに重点をおくことで、広い世界にはマルクス主義者という人もいたのだというところから入っていくのが、著者の戦略である。

文体

すでに「はじめに」で述べたように、著者は誰もヒルファディングを知らないという前

提から筆を起こしている。資本論の名前も知らず、マルクス経済学についても知らない読者を想定するということである。[4]　こうした読者像を踏まえて、著者は徹底的に平明かつ簡潔な文体を採用する。その特徴は以下の通りである。

重文・複文を避ける単文主義（一つの主語と一つの述語）。

短いセンテンス（引用を除けば、一文 2 行以内）

否定文を極力使わない（「・・・でない」は、「・・・である」より意味内容が広く、あいまい）

文脈で判断できる場合は、続く文章の主語を省略

受動態の使用を極力避ける（受動は能動よりもあいまい）

修飾語の使用は最小限

こうした手法は、著者の従来の啓蒙書でも採用されており、筆者の経験では学生にとって異常な判りやすさを発揮した。本書でもこうした判りやすさは健在であるが、一カ所だけ省略しすぎて判らない箇所がある。本書 69 ページの 11～12 行目「２つの軸で考えられており、２つめの軸が」である。本文中に１つめの軸が明示されていないので、何に対して２つめなのかが判らないのである。

本書の内容から

１評伝では、ヒルファディング家、学生活動家時代、軍医時代などがコンパクトにまとめられている。そこでは伝記的事実をめぐる細かい論争も紹介されている。ここだけでなく、本書の各所で論争が紹介されているが、それは著者の自説を正当化しようとするものではない。むしろ、研究者としての緻密さや公正さを示す効果を発揮している。マルクス主義を研究しているからといって怖い人でも、イデオロギーに凝り固まった人でもないという、研究者像が垣間見える仕掛けになっている。

２『金融資本論』では、マルクスなどとの比較で金融資本論の特徴が示されている。そのなかで価値論に関する比重がやや大きい。マルクスとの比較という発展史的な観点からは、これは重要ではある。しかし、本書でこのあと論じられる現代資本主義論との関わりでいえば、価値論の意味は小さい。しかも価値論は、初学者にはほとんど理解不能である。また、現代のマルクス経済学においては、価値論は消え去っているか、存在したとしても、マルクスやヒルファディングの時代のそれとはまったく別なものに変化している。この意味で、価値論に関する叙述は入門書としての本書では不適切である。

３中央ヨーロッパ論では、第一次大戦後の戦後秩序形成の問題の一環として、ハプスブルク帝国解体後の中央ヨーロッパの問題が扱われる。ここでの焦点はマルクス主義者内部の議論ではなくて、ナウマンらの「塹壕共同体論」との対比で、カウツキーやヒルファディングの所説を明らかにすることである。ここでは、２『金融資本論』とは対照的に、マルクス主義展開史ではなく、同時代史の観点が優越している。

４「ルードルフ・ヒルファディングの経済理論と思想の転換」では、『金融資本論』以後のヒルファディングの経済理論の変化が扱われる。いわゆる組織資本主義論の提起である。制度論的な観点からいえば、資本主義の組織化というコンセプトは、帝国主義時代の

[4]とすれば『ルードルフ・ヒルファディング研究』というタイトルにも一考の余地がある。

資本主義だけでなく現代資本主義を捉えるえでも重要である。さらに、組織化というコンセプトから、19 世紀の自由主義的資本主義を再構成することも可能である。この意味で、組織化は、その理論内容ではなくコンセプトから見て、なお開拓の余地があるものである。

著者によれば、ヒルファディングの組織資本主義論は、『金融資本論』で提起した資本主義モデルが特定の国民経済にしか適用できないという反省を踏まえて、登場したものである。この時期には、資本主義の組織化に関する様々な議論（組織化させようとする立場を含む）が、マルクス主義者からも、非マルクス主義者からも登場している。著者は、そのなかでヒルファディングの立論をいわゆる国独資論と似たものと説明している。そうした説明自体は誤りではない。より重要なのは、著者も指摘しているように、組織資本主義論が、国独資論とは違って、資本主義の脆弱性といった認識とは必ずしも結びついていない点である。こうした点が、資本主義の暴力性という最晩年のヒルファディングの立場を準備することになる。この点は、より強調されてよかった。

5「ヒルファディング外伝」では、独立社会民主党史が描かれる。この党は、ドイツ社会民主党の左派が、第一次大戦中に結成したものである。ドイツ革命の主要な担い手の１つであった革命的オプロイテも参加したこの党は、ドイツ共産党の母体となった政治組織の１つである。ヒルファディングはこの党に参加するとともに、ドイツ共産党への合流に反対する立場をとった。戦争体制に屈服した多数派社会民主党とも、コミンテルン･ドイツ共産党とも異なる独自の路線を堅持しようとした。

著者は、こうした独自路線を、独立社会民主党少数派（共産党合流反対派）の路線と重ね合わせて、高く評価する。

しかし、歴史を冷静に見れば、独立社会民主党は、共産党と多数派社会民主党とに吸収された政党にすぎない。第三の道は成立しなかったのである。こうしたことは著者もよく知っているはずである。にもかかわらず、独立社会民主党に歴史の可能性を見るかのごとき叙述を残したのは、この章のもとになった論文の執筆時期と関係がある。

もとの論文が書かれたのは 1980 年代である。この時期の日本では、マルクス葬送派が登場するとともに、社会主義一般に対する懐疑が広がった。そのなかで、資本主義と現存社会主義の両方に対抗する第３の道の可能性を問う論者も登場した。著者も、こうした流れに掉さす立場をとったのである。こうした立場が、21 世紀に書かれた本書にも残ってしまったのが、この章である。この意味で、この章は、著者が念頭に置く読者には理解が難しい。[5]

6「ヒルファディングの最期」では、ナチ政権下のドイツを離れ、ナチ占領下のフランスからさらに亡命を図ろうとして果たせなかった、ヒルファディングの最期が描かれる。死期迫るなかでのヒルファディングと関係者の動きが詳細に描かれている点は、この時期の亡命（しようとした）知識人の動きを知る上でも有益である。とりわけ、亡命を巡るヴィシー政権下の下級官僚の対応については、筆者も学ぶところが多かった。

---

[5]社会主義が資本主義のオルタナティブを志向したことは事実である。その社会主義が失効したからといって、資本主義に対するオルタナティブを探るという歴史的な課題が消え去るわけではないのは、もちろんである。

さらに重要なのは、ヒルファディングの遺稿「歴史の諸問題」に触れていることである。著者が翻訳『歴史の諸問題』の解説でも述べているように、この遺稿でヒルファディングは、暴力（Gewalt）が歴史の運動の決定的な契機であると主張し、経済決定論的な唯物史観の修正を提唱している。

暴力一般の歴史的な作用については、ヨーロッパでは、第一次大戦中から様々な人間の注目を集めてきた。史上初の総力戦体制やそれへの国民統合、毒ガス兵器などの大量殺戮兵器の登場などがその背景にある。ヒルファディングは、第一次大戦に、オーストリア軍の軍医として従軍していたために、大戦の暴力をどう捉えていたか定かではない。彼が暴力の問題に注目するのは、著者も述べているようにファシズムが登場し、国家権力を掌握する時期である。したがって暴力の問題とは、ヒルファディングにとっては、暴力（Gewalt）一般ではなくて、国家権力（Gewalt）の問題であったのかもしれない。[6]

とすれば、唯物史観の修正とは、下部構造決定論だけでなく、エンゲルス的な交互作用論も否定し、経済法則を与件として、国家の懲罰＝報酬システムや権力的経済調整・介入システムを中心とする社会経済構造論へのヒルファディングにおける移行を、示すものなのかもしれない。

もちろん遺稿の記述は断片的である。筆者のように解釈できるかもしれないが、そうでない解釈も可能であろう。しかし、遺稿の叙述が刺激的であり、イメージ喚起力に富むことは事実である。それだけに、遺稿のもつ可能性をより引き出すような方向で、本書が書かれてもよかったのではないか。もちろん専門書であれば、証拠もなしにイメージを膨らませる叙述は、研究からの逸脱である。著者の叙述も抑制的である。しかし入門書であるからこそ、推論であるとの断り書きを付したうえで、想定する読者を刺激するような解釈の幅を示すことができたのではないか？20 世紀は戦争と暴力の世紀なのだから。そして 21 世紀も、いまのところそれを継承しているのだから。

おわりに

これまで述べてきたように、入門書としての本書は、配列の面、テーマの選択の面、文体の面では成功している。内容についてもおおむね適切である。

しかし、筆者から見て不十分なのは、以下の三点である。

１『金融資本論』を扱った章での価値論の扱い

２独立社会民主党の扱い

３遺稿の扱い

このうち１については、著者は納得しないかもしれない。マルクス経済学の価値論をどう理解するのかというより根源的な点で、著者と筆者の見解が分かれているからである。したがって、この点については譲るとしても、そのほかの２点については、大いに改善の余地がある。独立社会民主党史に見れらる価値評価的な記述は撤廃し、客観主義的な記述に徹するべきであった。そのなかで、著者が評価する独立社会民主党の独立路線を支える基盤が何であったのか、それがなぜ失われたのか（あるいは存在しなかったのか）を示し

[6]ただし、「歴史の諸問題」における断片的な記述だけでは、こう論定できるだけの証拠はえられない。

た方が、歴史を学ぶ、あるいは、歴史に学ぶ初学者には親切だったのではないか？独立社会民主党の歴史は、歴史の行き止まりの１つなのだから。[7]

これとは逆に遺稿の場合には、遺稿が未来に開かれている性格をもつ文書であるがゆえに、より自由な記述に走った方がよかったのではないか。この部分は本書のしめにあたる部分であっただけに、未来に開かれた叙述で終わらせることによって、想定する読者をひきつけることができたのではないか？

[7]私見では、第３の道を標榜する立場は、ほとんどが中途半端なものに終わっている。かつての日本の民主社会党、最近ではギデンズ。